

# 斑鳩町竜田神社の氏子区域にみる祭礼の諸相

服部と北庄の場合 大宮守人

Aspects of Religious Services as Seen through the Section for Shrine Parishioners in the Tatsuta-jinja Shrine of

Ikaruga-cho

はじめに

- ① 竜田神社
- ② 服部の宮座と祭礼
- ③ 龍田北庄 春日神社の宮座
- ④ 宮座の変貌と不変の条件

## 【論文要旨】

服部は法隆寺の南約一キロ、北庄（龍田北）は西北約一キロにある。どちらも集落内に小社や寺を持ち、また小社の祭祀組織として宮座をもった伝統的な景観の村落である。

しかし、景観を詳細にみれば北庄は法隆寺の後背をなす矢田丘陵の南端部に掛かり山田の発達する小山間であり、服部は排水に苦勞する低地に盛り土した環壕集落の一種である。二集落とも都市化の波に洗われて新興住宅の中に埋もれんとする現状ながら今日からうじて維持されている祭祀組織と祭礼の差異には留意すべき点が認められる。

斑鳩一円の郷社の存在であった竜田神社（新宮）の祭礼に、かつてはとも奉仕した二集落であったが、今日では北庄の元宮座（春日講）のみが伝統的な衣装や御供で竜田参り（竜田神社の例祭への参加）を続けている。

近代化のなかで生じた二集落の祭礼の差異は祭祀組織の持つ資産の有無が誘因となつて醸し出されたものと見られ、社会生活としての祭礼の近未来に示唆を与えるものである。ここでは現状の祭礼民俗を概観して当該地域文化の変容過程理解への一端としたい。

なお、この地域には寺社・村落関連の古文書・古記録が豊富で民俗の変容過程を時系列として注意深くとらえることも学際的取り組みをもつてすれば可能であり、特に新発見の斑鳩町服部神楽講文書の整理調査・解説・研究によってこの地域の宮座等の理解の精度が飛躍的に向上した（蘭部・大宮守友論文参照）。

また、関係資料等として、御宮司家文書（龍田）と福貴田家文書（服部）を共同研究として整理調査・目録作成し、今後の研究に資することができた。

## はじめに

平成十一・十二・十三年に相次いで斑鳩町服部・龍田・北庄を秋祭の祭礼民俗を中心に、年中行事等を実地に見聞した。都市化の波に洗われて斑鳩町一帯の郷社的存在である竜田新宮(旧県社竜田神社)の祭礼も変貌するなか、唯一北庄(斑鳩町龍田北町)の元宮座(春日講)のみが衣装、御供等、旧来の伝統を堅持し竜田新宮の秋祭にゴクアゲの社参等(竜田参りの名残)を続けている。一方、服部では村落内の素盞鳴神社(旧午頭天王社)の宮座講の中に、かつては竜田参りを行った株座系の神楽講と村座系のケイチン講が、個々の親睦会的総会を年一度二月に持つて並立してきたが、世代交代や新住民の参加により村落内の氏神祭礼のあり方が種々模索される中で両講の活動は細々とはあるがなお続けられている。

まずは、この地域の近代における祭礼変遷の理解にあたり、斑鳩の竜田神社の概観とこの二集落の現状の祭礼民俗の輪郭を最も鮮明に表している昭和三十八年刊の『斑鳩町史』の記述を幹としながら、その後の変遷を補足し現状を俯瞰してみたい。

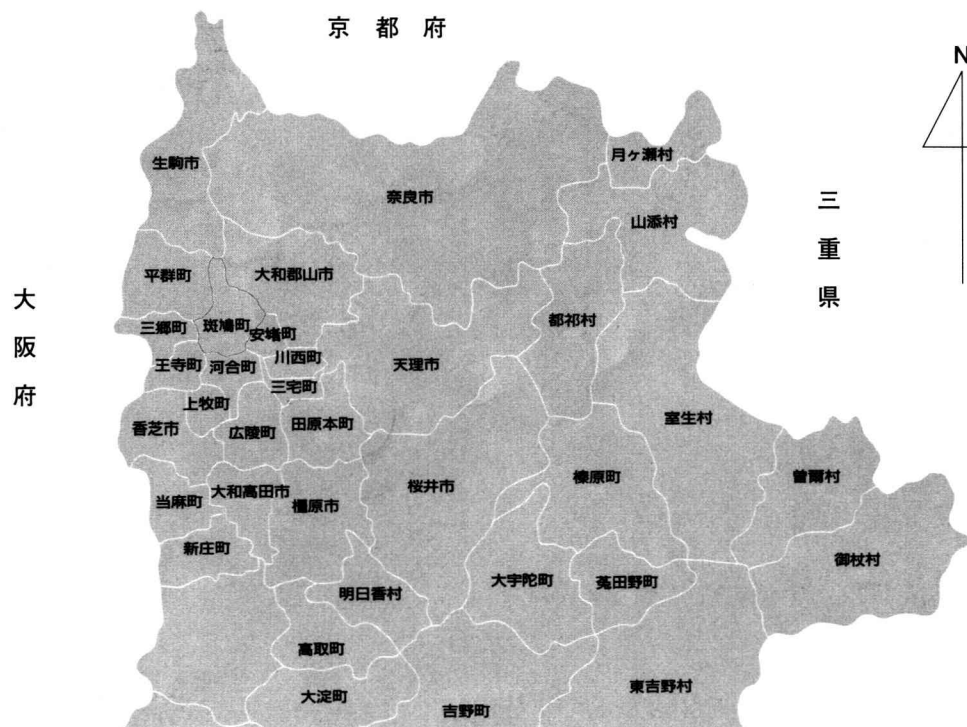
### ①竜田神社

斑鳩町龍田のほぼ中央(龍田小字馬場)に鎮座し、瑞垣の内には天御柱命・国御柱命の二柱の風神を祀る本社と、龍田比古命・龍田比女命を祀る向かって左の摂社のほか小社が二殿あり、計四殿が並んで祀られている。天武天皇四年(六七六)四月に龍田の立野に祀られた風神は、『延喜式』に「龍田坐天御柱国御柱神社二座」とあるが、これは当社ではなく三郷町立野の旧官幣大社龍田神社とされている。斑鳩の当社の創祀は判然としないが、社伝によれば現在の境内北方の御廟山(御坊山)が龍田における神奈備で三室山であるといい、当社はもとはこの山に創祀さ

れ、のちに南麓に遷宮したものと伝えている。明治三年の『明細絵図』(御宮司家蔵)には北庄の北後に龍田社旧跡と明記されたところがあり、江戸後期とみられる『龍田新宮芝絵図』(福井家文書)には同所を竜田末社と記している。

現在の三郷町立野の龍田大社を本宮とし当社は「龍田新宮」または「新龍田」と称し、祭礼には立野からの神幸の御旅所となった。一方、法隆寺との関係は、聖徳太子が法隆寺創始にあたって立野の社に祈願したので法隆寺の建立成就ののち、龍田大明神を鎮守として勧請したことから竜田神社と称し地名も龍田と称するに至ったと伝えている。法隆寺から当社へは別当坊が置かれ、例祭には三十口の僧侶を供し、莊嚴なる法会を催し「龍田会」または「龍田三十講」とも称された。中世のこの様子は『嘉元記』の記事に伺え、「龍田参り」や田楽、猿楽奉納などの盛大であったことが記されている。また、服部の神楽講文書応永二十五年(一四一八)「三里条々規式」の後半部にみえる「応永廿五年八月六日龍田御社雨喜相撲作法役人等事」には竜田社における雨悦びの相撲作法の詳細描写があり、その出来映えを奈良と競う風が読みとれる。

明治の神仏分離により法隆寺から分れ三郷町立野の龍田本宮の摂社となったが、やがて県社となり大正十一年三月には本宮と全く分離した。御宮司家文書の明治二年の『境内明細絵図』には正面に現在の如く四殿が並らぶ。今の本殿は流造桧皮葺、その東に三大神社、西は龍田比古・龍田比女神社と滝祭神社である。本殿の前方西に地主神社(猿田彦神)東方に川合神社をまつる。この前方に鳥居・拝殿・表の鳥居が順次立っている。この四殿の西方には広田社、その南に恵美須・祇園・埴山姫などの末社がある。また、割り拝殿東には大日堂や東之坊が見える。昭和五十一年八月に拝殿を焼失したが、同五十三年春に拝殿再建工事が始められた。江戸初期頃と見られる福井家文書の『境内古図』には本社四殿の東方には塔と経堂が立ち、さらに東方に門前・北坊・新坊・かや坊・



法心坊・惣坊・東之坊の各坊屋敷が記されており、神仏習合の様子が色濃く読みとれる。なお拝殿の東方には伝灯寺と記されており、現在これは浄慶寺（神社の東約三〇〇m）に移築されている。同図には楼門が描かれ、その西方には「北庄」・「いなば」など各仮屋があり、表の鳥居の東方には「とかわ仮屋」、西方には「みさと仮屋」があった。「みさと仮屋」の西方に鐘楼があり、さらに西南方に観音堂が立っていた。仮屋は各集落や「みさと」のように丹後・五百井・服部の各集落が連合して三里座を組織して「龍田参り」と称し、これらの仮屋に詰めた。後述する服部の神楽講とは、三里座を構成する三集落の中の服部に住む株座の人々によって営まれてきたものである。服部の神楽講文書応永二十五年（二四一八）「三里条々規式」に、

龍田殿ヨリ富河カリヤ茶所にオカサリ有テ（中略）御シヨウクワン至極候間（下略）

或いは、

オトナノ座ハ西方ノ庭、東方ニ龍田三ヶ所座セラレ、三里カリヤハ相撲取役人ノ幕ヤニスル（下略）

等とあり、各所の仮屋は祭礼時の座衆の詰め所として使用の他、飾りつけて茶所や相撲取役人の幕屋としても使われて当時の祭礼、神賑の充実が窺える。

明治二年の御宮司家文書の『境内図』には仮屋は記されていないが、戦後まで仮屋は存在し、北庄ではその仮屋を撤収した後、集落の春日神社境内で集会所に転用して使用していたというが、今はない。今日の秋祭りは竜田神社秋季大祭として十月十七日午前十時に開式、氏子総代、稚児、北庄春日講が参列する。午後一時三十分より渡御。西御旅所祭と東御旅所祭がある。この間三台の太鼓台の巡幸がある。前夜祭（宵宮祭）は十月十六日午後七時より、氏子総代、稚児、太鼓台代表（龍田青年団北部祭礼実行委員会 東部太鼓台）各代表が参列する。

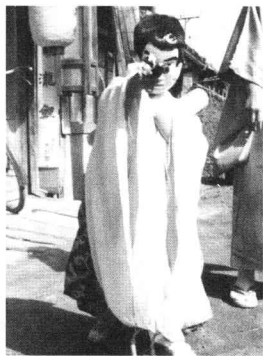
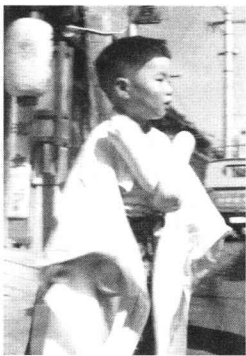
本宮からの神幸を迎える祭礼形態がなくなり、稚児行列や太鼓台が目立つ単独の都市型祭礼へと変化充実されてきたなかに、北庄の元宮座だけが、宮座の衣装も古式ゆかしく参列し光彩を放っている。ただし、本宮座の方にも変化がある。それは伝統の衣装をまとった稚児がここ数年来途絶えたままになっていることである。本社の稚児行列との服装の違いなどに違和感があり、トウヤの身内の子どもたちも倦厭することから稚児のなり手が無いのが実情である。

## ②服部の宮座と祭礼

旧村六十五戸、村落内の鎮守、素盞鳴神社は氏子一同が宮座を営む。ただし、ケイチンと称し、二月二十三日には株座系十二戸（神楽講）、村座系三十六戸が別々に寄り合いそれぞれトウヤを引継ぎ宴会を行う。神楽講は竜田神社の例祭に御供上げ（竜田参り）を行う三里座（服部・五百井・丹後の三集落の株座系の人々によって受け継がれた竜田参りの座）に関係のあった服部の住人の宮田が八反あったが終戦後の農地改革でなくなった。かつては「龍田参り」にあたって龍田川畔三室山のほとりのゴヘイ岩の付近でミソギをし身を浄めた。当屋は毎年クジ引で宵宮にゴクドーヤとミキドーヤを二人宛きめる。（一人は控えである）。ゴクドーヤが主になりミキドーヤも手伝って年末に正月の鏡餅をつく。神社の縄などもこのときに作る。この日、翌年のトウヤのクジ引をして当った家へ使で来年のトウヤであることを知らせておく。

十月十三日に手伝い十人のものがミキドーヤに寄り祭のゴクとして三白の餅を掲ぐ。一白はお鏡、他は座中でいただく。座につくのは手伝いの十人で毎年交代している。もとはこの日に酒がでて、帰りには餅を十二個もらって帰った（昭和三十八年頃には手伝いはしなくなっていた）。なお、このゴクツキのとき当屋の女人はみな外へ出て、チソウを作るようになったら帰ってきたというが、これも昭和三十八年頃には行われて





龍田神社の祭礼に参加した北庄元宮座の稚児(昭和十年代)



同 具足役の少年

いない。

かつてはミキドーヤではゴクドーヤも手伝い甘酒七升余りを十四日の宵宮に間に合うように作った。十四日、ミキドーヤは入り口に青竹を立て注連縄を張って一同を待つ。ミキドーヤに座員が集合したら竜田神社から派遣の神主とともに唐櫃に入れたお供えをもって宮さんに行く。宮座の衣装等は平服。神主により祭典、かつてはこの後蓮根、牛蒡、蒟蒻、枝豆、蒲鉾、甘酒でチソウがあった。これも昭和三十八年頃すでになく、今日ではチソウも仕出し弁当になっている。

マツリは十五日。お供えの御供は稲の穂、盛塩、海山のもの、鯉(生きたもの)。講田解放後チソウはなくなった。

宮算用といって一月中旬ゴクトーヤへ寄りチソウになり帳面をつぎへ渡す。

### ○神楽講の行事

神楽講の十二人衆は服部、五百井、丹後で組む三里座に属した。故老

によれば敗戦後二回ほど龍田へ参った記憶があるという。以下は神楽講のかつての行事である。

十月十二日ゴクツキ、この時女人は外へ出ている。

十三日はゴヘイ作り。神主がきて五尺二寸五分の雄竹を二本くくり、大杉原のタレをつける。

十五日朝十時ごろ当屋へ寄り、素襖、冠をきて中啓を持って、龍田の大橋まで本宮の神幸を迎えに行く。当屋の子がゴヘイをもつ。お旅所へ着いたら餅、葉付大根、牛蒡、稲穂、蓮根、爽豆、柳の枝に蜜柑三、茄子三、出刃庖丁三、錐をくくり、台にのせ神饌を供する。

神楽講では二月二十六日(旧正月二十六日)の朝に当屋へ寄り、風呂に入って昼食のチソウになった。

村座系でケイチンというのを二月二十六日に行なっていた。両方とも合併してからなくなったと町史(昭和三十八年刊)にはあるが、これは今日も続いている。

### ③龍田北庄 春日神社の宮座

旧村四十五戸中十二戸が元宮座を営なむ。もとは十人衆といふ十戸だった。大正十一年の改正で、十人成といつて玄米一石五斗を出し、さらに祝言料として玄米一石出せば座入りできるようになる。また他村へ出たもので再び戻ってきたときは、足洗(アシアライ)といい酒三升、豆腐六丁で座中を招待しなければならぬ。

講中の男子は十九歳に達したときに座入をし、正月座に御神酒二升、正月肴、豆腐四丁、鉢肴にて座中にふるまう。但し座中の者で座入した男がないときは行事に参列できないから、この場合に限り嫡男子が十五歳に達したら、特に座入りを許されている。

マツリは十月八日、もとは十月十五日であった。当日の朝、神主とソネツタンが当屋へきて、お供えやミユなど準備をする。神主は竹を四尺

に切りゴヘイを作る。昼すぎに当屋は家からお供をもっていく。式にソネットンがきてミユと神楽をあげる。このゴヘイは済しだい当屋がもつて帰り、翌年一月十四日のドンドにあげる。

御膳は洗米一升、米穂、薑、御酒、鏡（座餅といい、十人衆が各自一重を供える）、海魚（生魚一尾）、川魚（鯉一尾）、昆布五十匁、椎茸一、松茸五、高野二十、まいも、くり、さつまいも、ごんぼ、大根五、豆、柿十一、菓子、塩、御水。十人衆は昔は、一旦坐ると動かなかったので準備はすべてトウヤと年頭二人（輪番で年長より当る）で当った。今は十人衆も朝からきて宮の清掃奉仕を手伝う。昼は簡単な食事で夕食にダシ汁をふるまう。一人五合宛でミタラシのようにして指で押したものをミソ汁でたく。翌十六日トウヤで片づけをする。年間行事はつぎの通りである。

#### ○六日座

正月六日で御田植祭といい、宮さんへ十人衆が寄り牛玉押しをする。印を押したものを漆の木にはさみ、大字全戸の数を作る。これを春、苗代に立てる。夕食は当屋で準備する。

#### ○垣結とトウワタシ

垣結といつて三月十日（昭和三十六年時点）で三月十五日、以前は二月十五日であったという）に宮掃除、垣根の刈り込みや小修理などをして、つぎヘトウワタシをする。

この日は、朝八時頃にはトウヤ（当屋）へ十人衆（春日講員）が集まって餅を搗き、垣結の日に独特の古風な「ぼた」餅風のものをつくる。

朝から当屋の家へ寄合い、キナ粉（大豆の粉）で餅取りをし、さらに残ったキナ粉に塩味の小豆汁を掛けて捏ね、これで餅を包む。容器に入れたその餅の上にもまたこの餡を盛りつけ、十人衆へ分けて持ち帰る。

この材料として前日までに各戸から餅米と小豆一合を集めておく。塩味は一見奇異に思えるが、キナ粉と小豆の素材の味をよく浮き立たせて

美味しいものである。今は塩加減をかなり控えており、本来はもっと辛いいものであったという。特に神仏に供えることはないというのが判然としていない。

餅つきの後は各自餅を持ち帰り休憩の後、春日神社に集合して垣根の刈り込みや、境内木の枝払い、清掃などをして昼に至る。

そして再びトウヤに集まり昼食となる。その後、神社で作業の続きを行い、さらに年貢（今は住宅地の貸地料一年分）の徴収に向かう。夕方には再び当屋に集まり会食をする。ここでつぎのトウヤに引き継ぎが行われる。つまり、垣結の日は年貢の徴収や、春日神社境内の管理作業、トウヤ渡しがある点から春日講（十人衆）の一年間の決算・総会の日ということが出来る。

#### ○お渡し迎え

十月二十五日に稚児と具足とがゴヘイと長刀をもって立野の龍田神社からお渡しする時、龍田大橋の松の太木三本あるところまでお迎えにいった。お旅所へつくと、龍田の皮座の人が牛の皮をもって業平道を東から西へ通る。それを渡御の一人が弓で射て、お旅所である竜田神社へ着御。この時の神饌は鏡餅一重、神酒、蓮根、柿籠一杯、十六餅（小餅を四列に縦横十六個並べたもの四段の三宝一対）洗米、塩水、鯉一尾、松茸、にんじん、大根、山の芋など。おさがりをトウヤの宴会でいただく。稚児と具足は毎年十人衆で交代して段取りしていた。

神饌の餅は二十三日当屋へ十人衆が寄って搗く。昭和三十六年当時にもお渡しはすでに無く、龍田の子供がミコシをかついで蛾瀬から中学校を廻り神社へ帰ってくるようになっていた。今日竜田神社の秋祭りには三グループ（北庄は北部太鼓台に参加）の太鼓台が巡幸する形式に変わってきている。また御供は北庄十人衆では竜田神社の神前へお供えすることになっている。

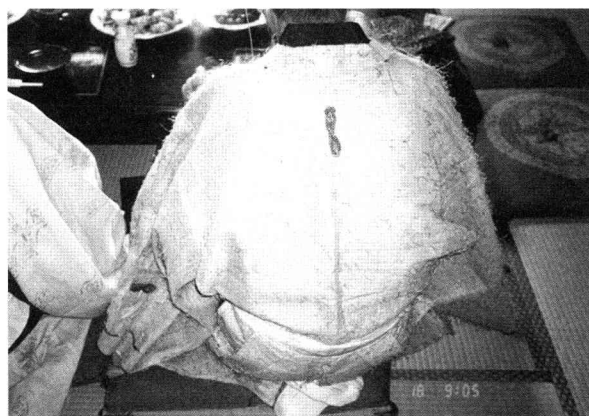
さらに元宮座にはつぎのような規約がある。一老が神社について全責



①10/18朝9時前には10人衆がトウヤに集合



⑤御幣・提灯を先頭に行く



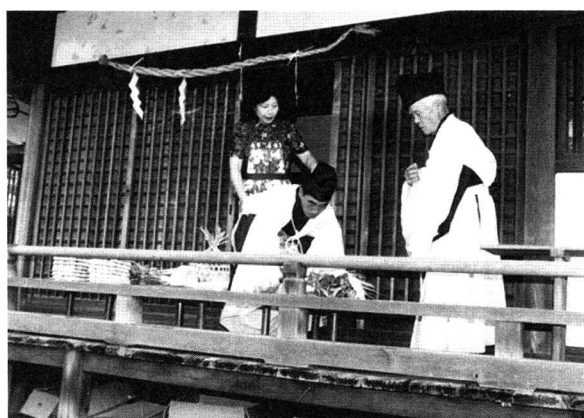
②一老だけは毛羽立った薄茶の直垂を着る



⑥大鳥居をくぐり境内へ



③9時半頃竜田神社へ出発



⑦神社の神饌所の廊下に御供を仮置きする



④歩いて竜田神社へ渡る



⑧魚は必ず生きた鯉を準備する

任をもち、宮の管理をしているので一老給として五斗七升五合（昭和七年減給されたもの）の他に燈明料と山とがついていた。今は講田もなくなったので三百円を渡すのみとなった（昭和三十六年当時）。

また講中の者で嫡出子出生の際は男女に拘わらず、十一日の祝餅として年内に座中に配布する（一重一升）。座中の嫡出子で婚姻するときは祝言として本膳で座中の女人を招待する。座中の者で養子するときは以上のほか「足洗い」として六日座に正月肴、豆腐四丁、御神酒二升を饗応することになっている。

#### ④ 宮座の変貌と不変の条件——結びにかえて——

服部では村落の鎮守、素盞鳴神社の祭祀に氏子として宮座を営んでいるが、ケイチンと称して株座系十二人衆としての神楽講と村座系三十六人衆の寄り合いが年一度同日（二月二十三日）別個に営まれてきた。また、北庄では概ね維持されているが、いずれも敗戦後の農地改革により「宮田」や「講田」がなくなり、宮座の運営に大きな影響が出て服部をはじめとして「龍田参り」（秋祭りに御供を竜田社に供える）を中止してしまった。今日では北庄のみが竜田神社の例祭Ⅱ秋祭りに関わって御供を上げているが続いている。御供の内容、衣装、組織等も維持し得た背景には、講の共有地が農地改革の嵐を乗り越えて維持されたことが重要な要素と考えられ、特に矢田丘陵の南端にかかる山林が共有地に含まれていたことが北庄の祭礼組織の存続に大きく影響したとみられる。なお、北庄は御宮司家蔵の『明細絵図』には「神主屋敷」との注が見え、神仏分離期の龍田社宮司である御宮司常陸の本拠地でもあった。また、元宮講の構成員にも御宮知（司）姓が多く、一統が関係者で構成されており、神仏分離期以来の伝統を継承する気風が強いと見ることもできる。しかし一方、講と一講員間で共有地の所屬をめぐる民事裁判となり、伝統行事継承の実績により講側が勝訴するなど、講員の結束が高まった

のも大きな要因とみられる。

同一地域内の祭礼組織の時間軸における変遷の差違は地理的条件が間接的に作用し、山林は農地解放の対象外とされたことにより、変遷スピードに差が生じたとするのはいささか乱暴なようだが、資産の有無が組織の存立そのものという普遍的な観点を再認識させる一面も見られるのである。

一方、地域における祭礼も近代化の波に洗われて変化している。この地域においても、竜田神社（斑鳩町）の秋祭りは龍田大社（三郷町）からの神輿を迎えて行う形から、独立して新宮としての秋祭りをを行い、地区ごとの太鼓台が巡行して神社に集合する祭礼に変化してきている。さらに各集落の神社の秋祭りは完結している。集落の宮座から竜田神社へ御供を上げるような関係は衰退し、服部では太鼓台も集落内の巡行にとどまっている。地域社会と祭礼との関係は一概には論じられないが、様々な近代化の波に洗われても続いているというところにその意義がある。

現状の民俗に最も強い影響を与えた震源を明治の神仏分離期と昭和二十年の敗戦に伴う改革期ととらえ、その前史として豊富な歴史資料を活用して祭礼組織の変遷史の精度を上げること、地域文化への理解を深め得ると考える。

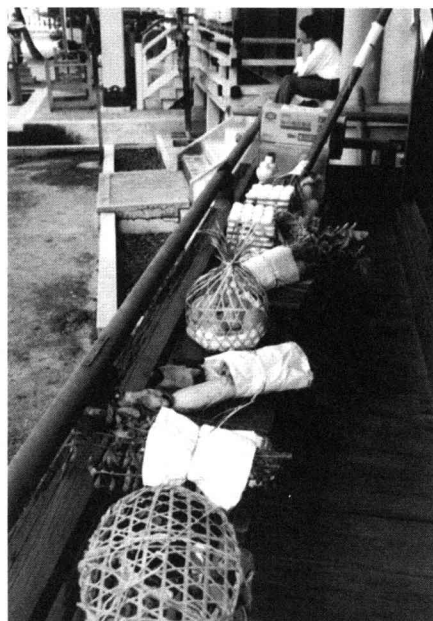
ちなみに服部の新出の古文書の分析をとおして、現況に至るまでの祭祀、祭礼組織の変遷も単純ではなく、折々の時代背景のもとで大小のうねりが繰り返されてきたことがわかってきた。服部神楽講文書、同福貴田家文書、御宮司家文書の調査・研究は、法隆寺関係の資料の整備の進展とともに、村落側の資料としてこの地域の村落史、祭礼史、地域文化史の解明に有意義であろう。今後もうこうした村落側の古文書が発掘される可能性もあり、丹念な探索と資料化が期待される。

（奈良県立民俗博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇三年七月七日受理、二〇〇三年七月二五日審査終了）



⑨神社の神饌は別途神饌所内に準備されている



⑩準備の整った北庄元宮座の御供



⑪神社の社務所で控える氏子総と北庄元宮座十人衆

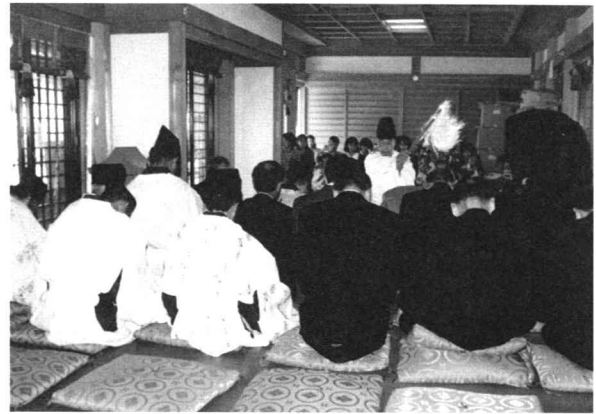


⑫手水を使う

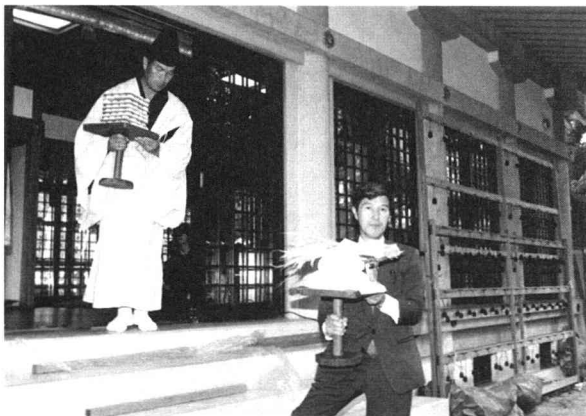


⑬宮司以下神職を先頭に拝殿へ向かう

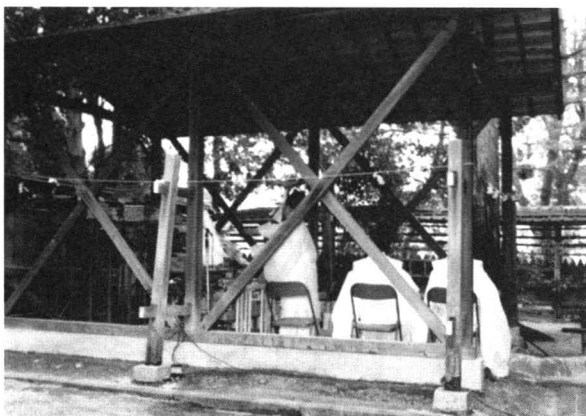




⑭氏子総代等と拝殿に着座する北庄元宮座（午前十時修祓により開式）



⑮神社の神饌のあと「十六の餅」をはじめ北庄の神饌を伝供する



⑯玉串拝礼をする北庄の元宮座十人衆



⑰本殿祭終了後すぐに元宮座は引き上げる



⑱太鼓台は近年に3グループが組織され昼頃には境内に集合



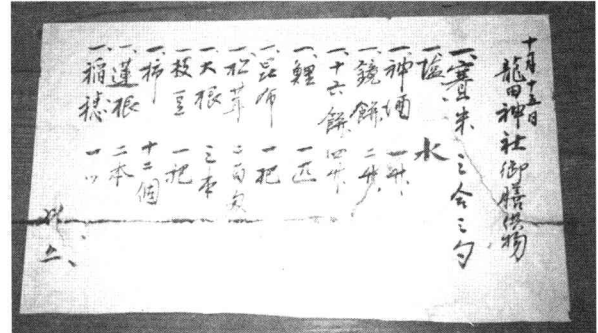
⑱元宮座は渡御祭、御旅所祭には参加しない



⑳トウヤへ引き上げ御供割りをする十八衆



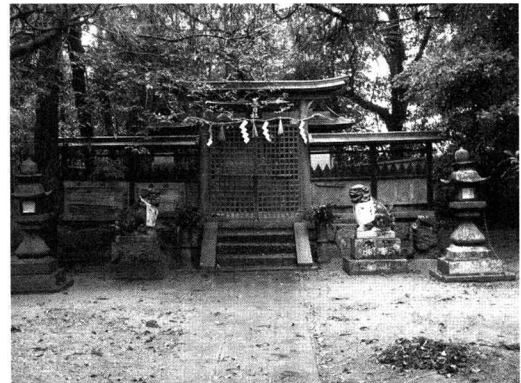
㉑トウヤでの御供搗き風景(祭の2日前に十六の餅や鏡餅を準備)



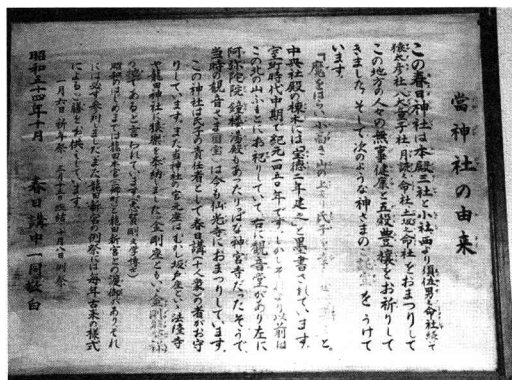
㉒御供を入れる唐櫃の蓋に貼られた神饌の覚え



㉓北庄の春日神社



㉔秋祭りは十月八日 もとは竜田神社と同日であった



㉕拝殿内の由来書(昭和54年春日講中一同)



㉖北庄は矢田丘陵の南端に位置する



服部の素戔鳴神社の宵宮祭



①夕刻宮座講のミキドウヤに集合



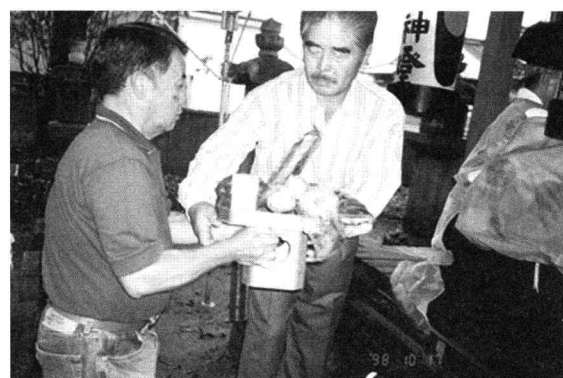
②今は唐櫃には玉串を入れて運ぶ



⑥主な御供は事前に神社の控え所で準備



③④⑤神職は竜田神社（新宮）から派遣される  
神職・ミキドウヤを先頭に御供を入れた唐櫃をかついで素戔鳴神社へ向かう



⑦献饌



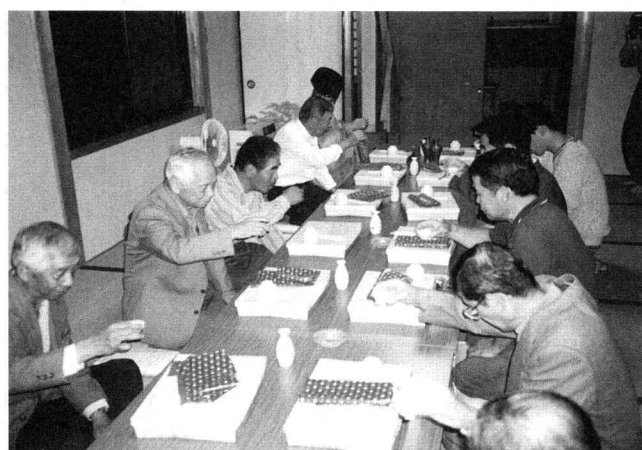
⑧祝詞奏上



⑨各戸の代表として女性も参加し  
玉串拝礼を行う



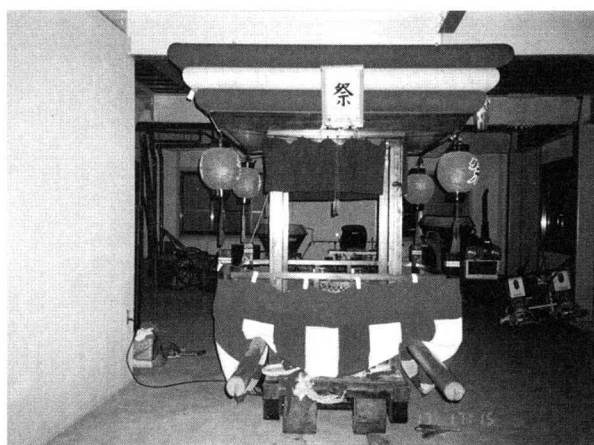
⑩服部春日神社の宵宮（拝殿前）



⑪宵宮祭のあと仕出し弁当で直会がおこなわれる。

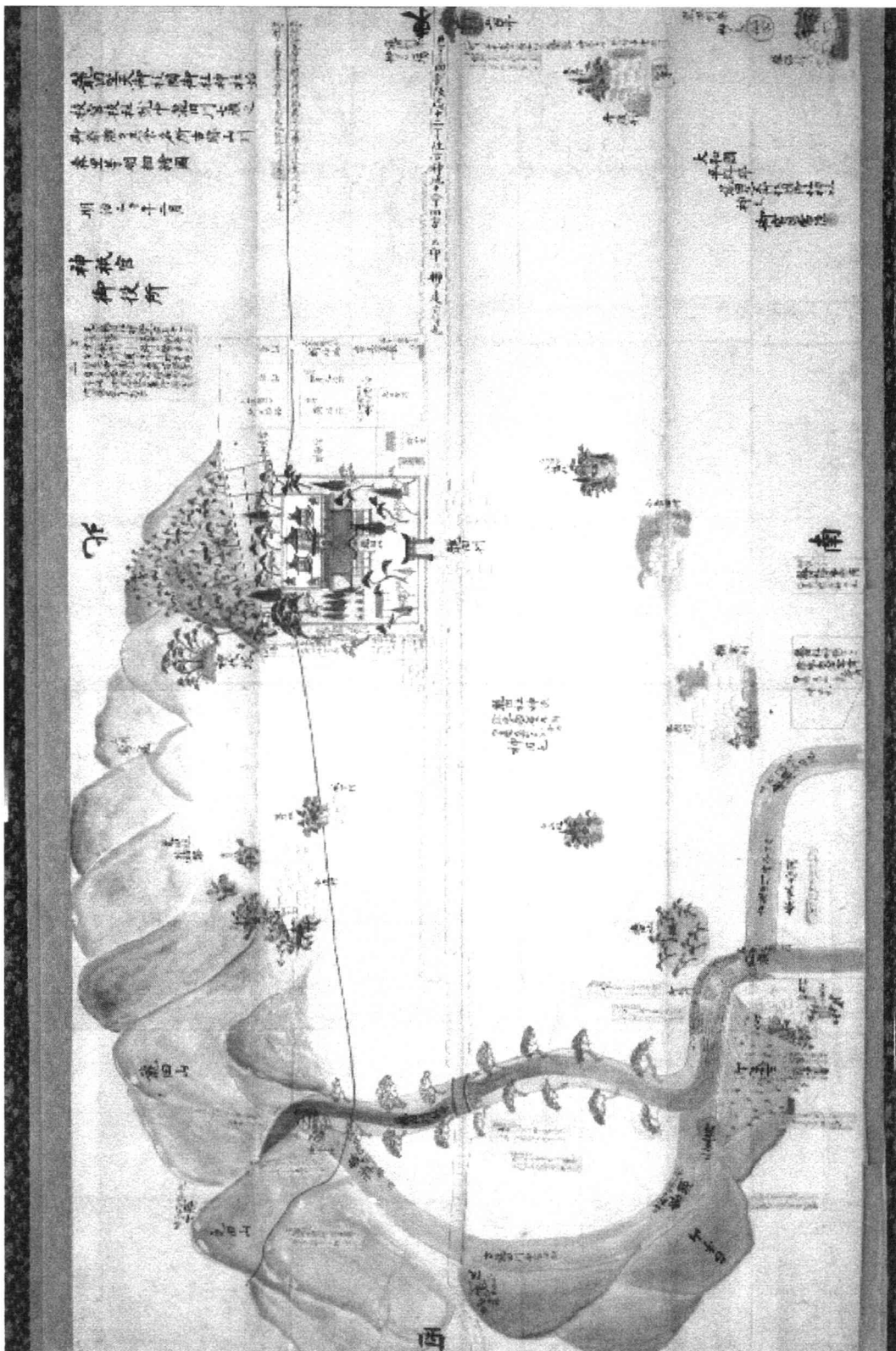


⑫祭は竜田神社と同日なので神職の参加は宵宮のみ。



⑬太鼓台は服部の集落内だけの巡幸で、竜田神社への合流はない。

軸装紙本著色一幅 91.7×157.6cm (図のみ寸法)



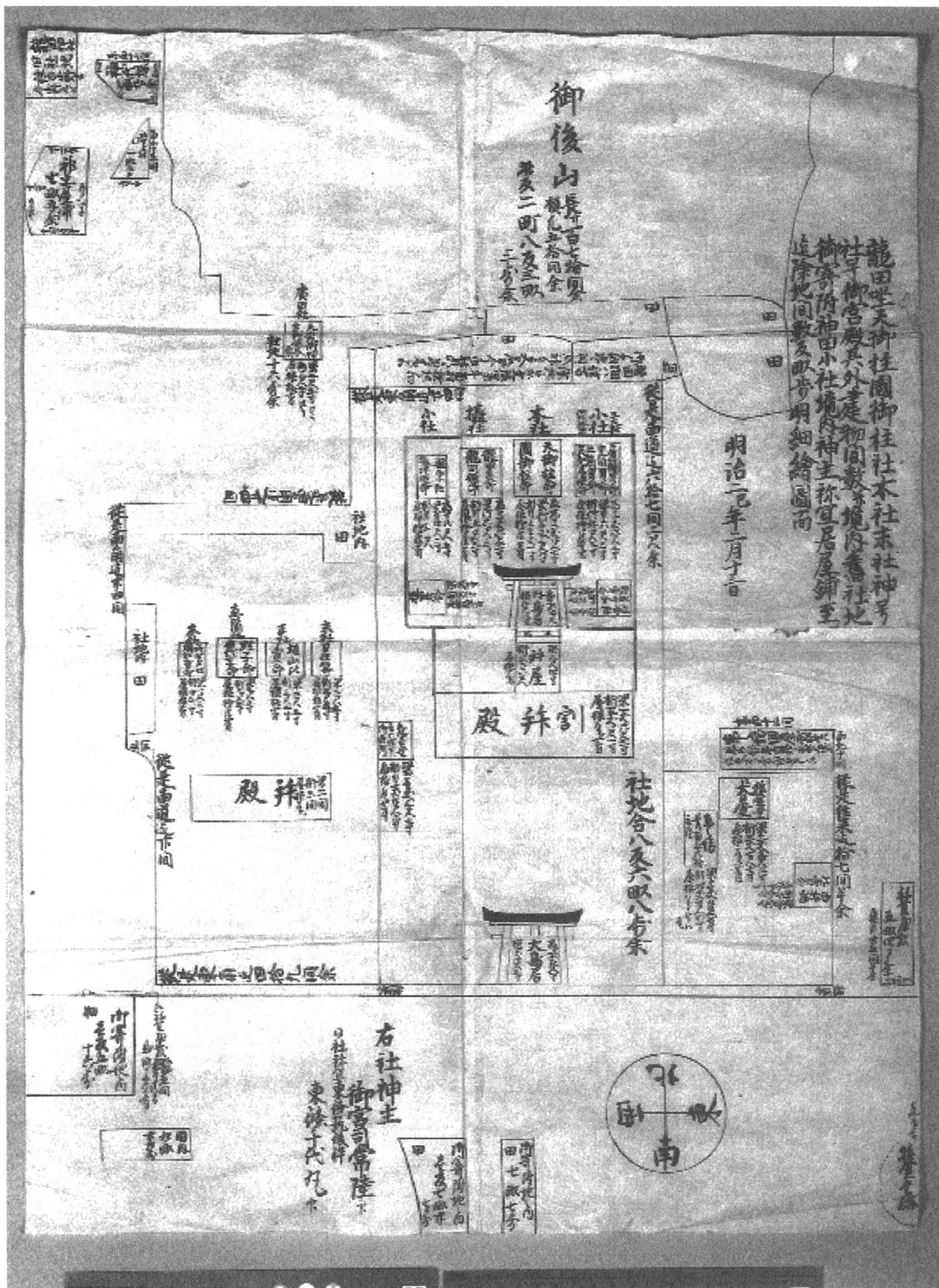
図版1 龍田坐天御柱国御柱神社始枝宮社就中龍田川七瀬之御祭瀬々其余名所古跡山川森里等明細絵図 (明治2年)  
斑鳩町龍田 御宮司家蔵



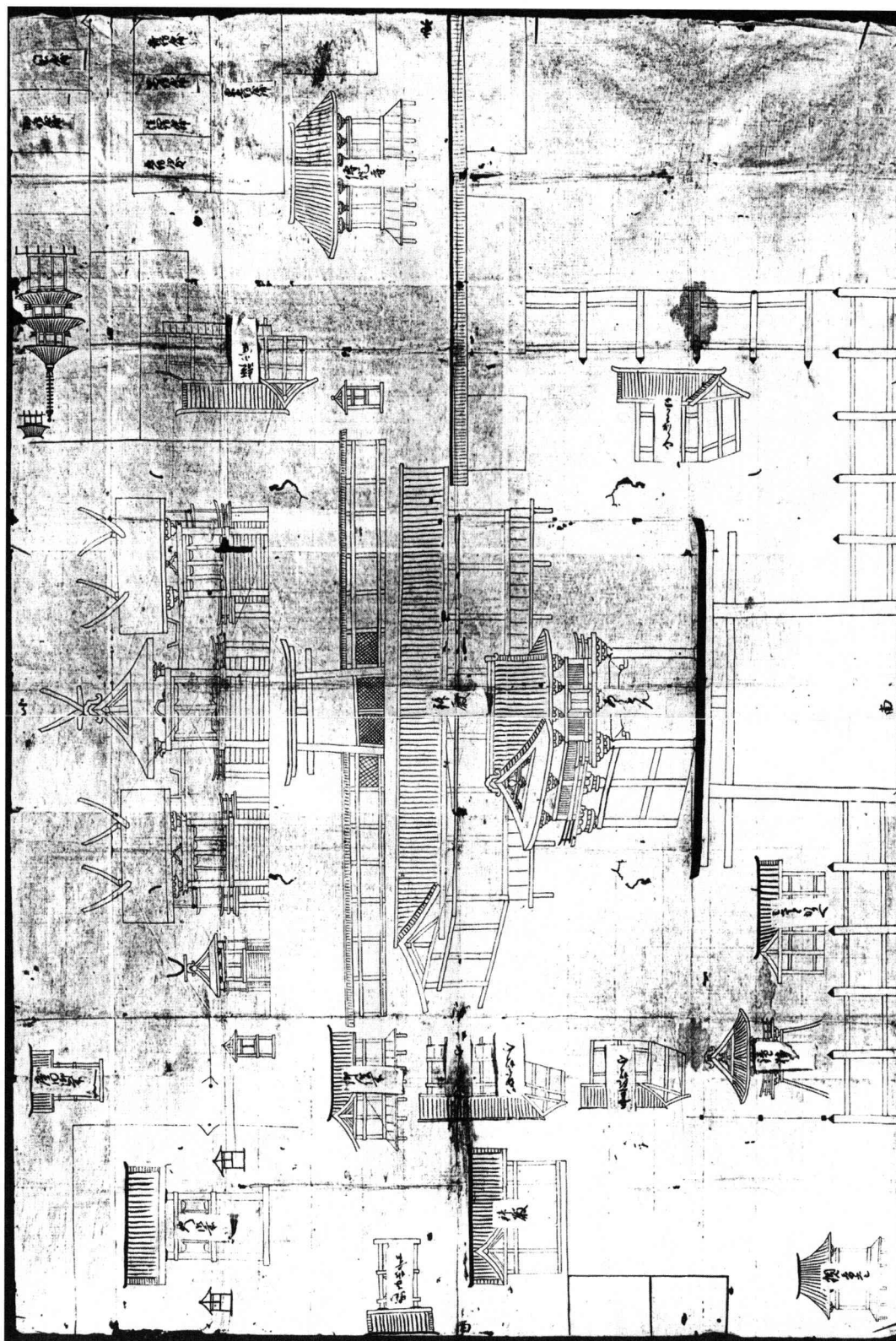


図版2 竜田新宮芝絵図（江戸後期）斑鳩町龍田 福井家文書

斑鳩竜田神社や法隆寺、各集落・墓地・塚・道・川や藤ノ木古墳と見られる「山稜」・龍田氏の居館跡と見られる「屋敷跡」などが画かれ神仏分離期以前の仏教施設などもよく表されている。御宮司家の明細図と合わせ見ると興味深い。なお、福井家は「龍田政所」とも称されたといい、「龍田新宮別当東之坊」の流れをくむ。

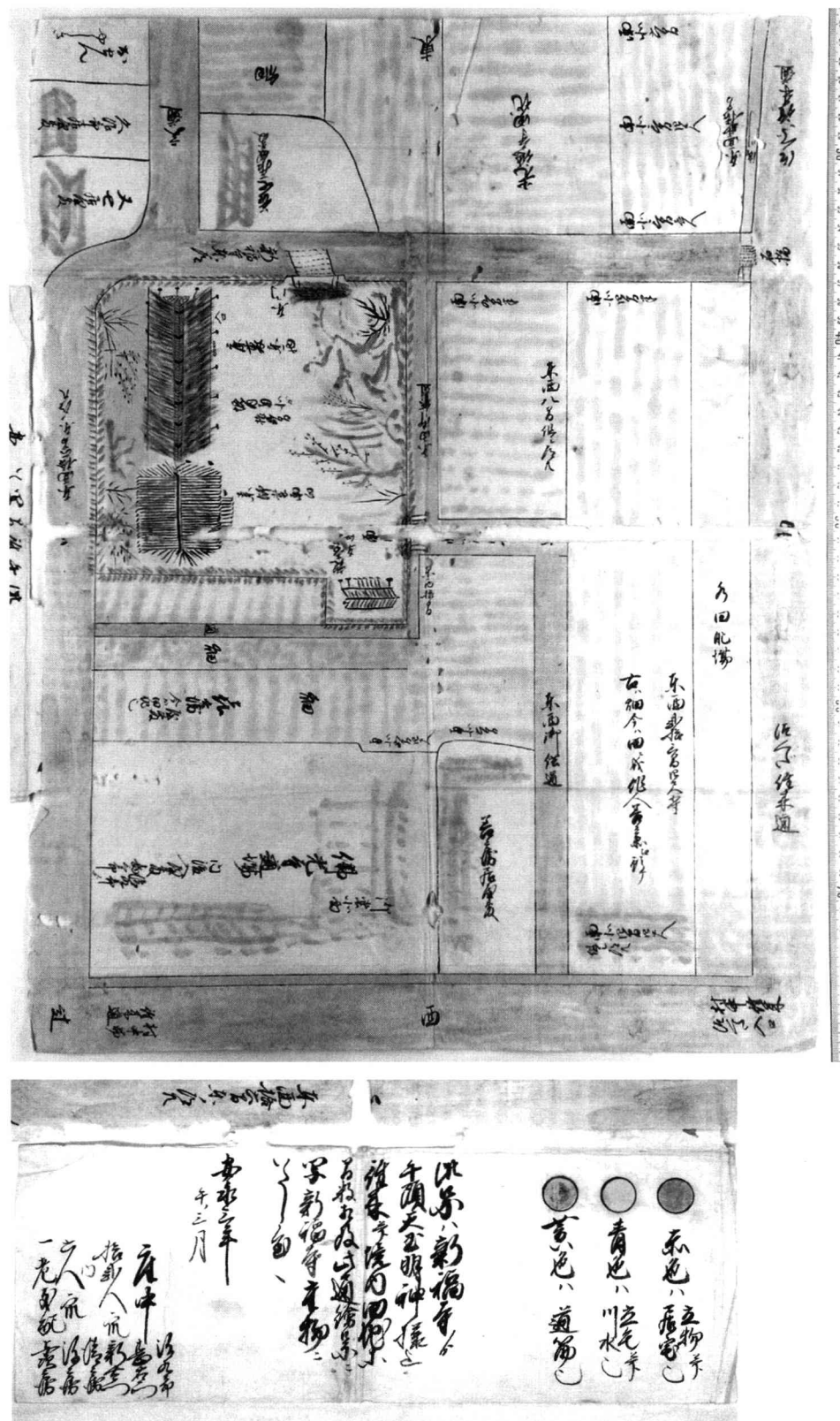


図版3 竜田新宮境内建物配置図(明治2年)斑鳩町龍田 御宮司家文書No.210



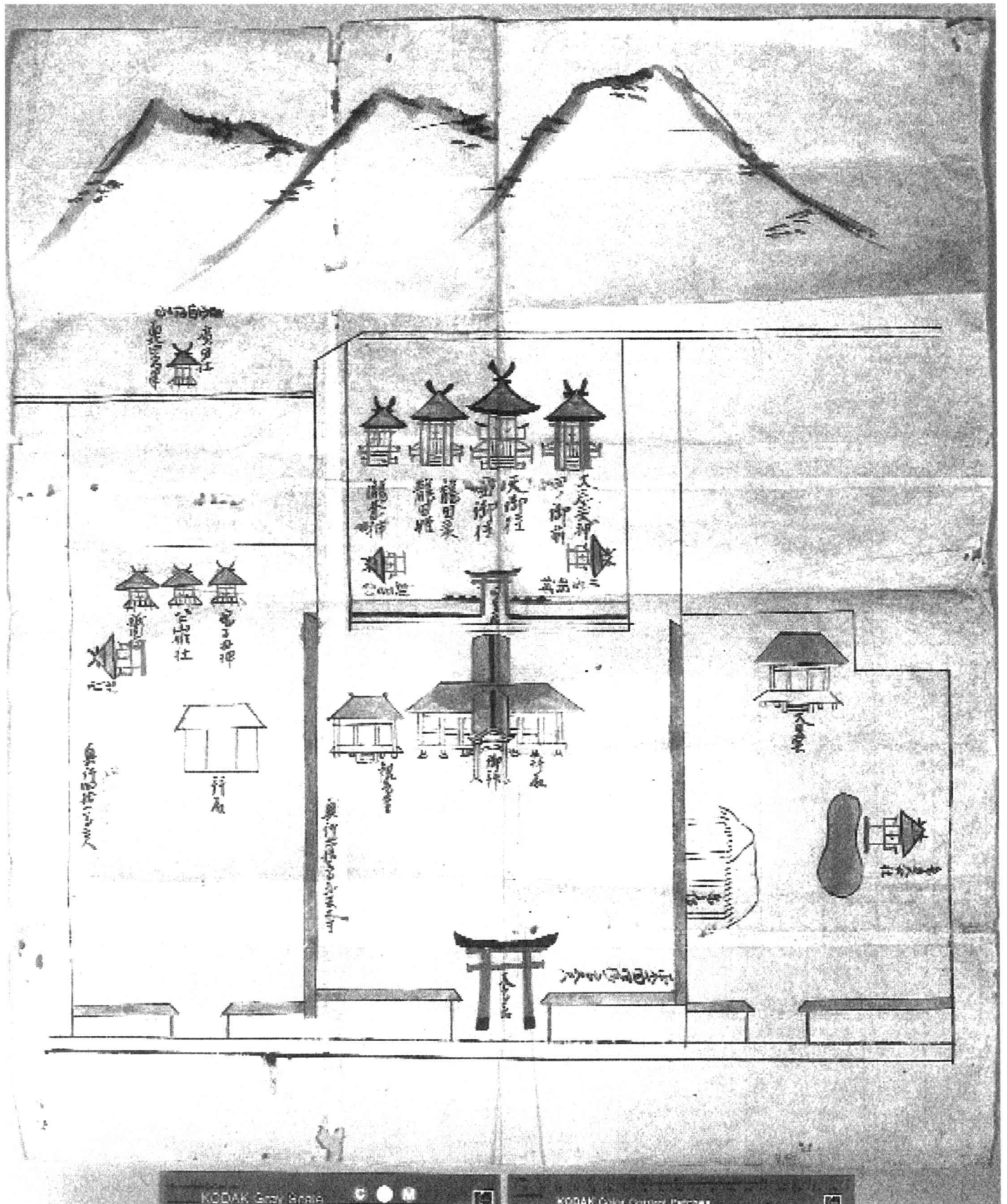
図版 4 竜田新宮境内図（年代不詳）斑鳩町龍田 福井家文書



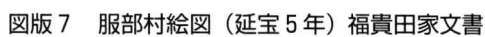


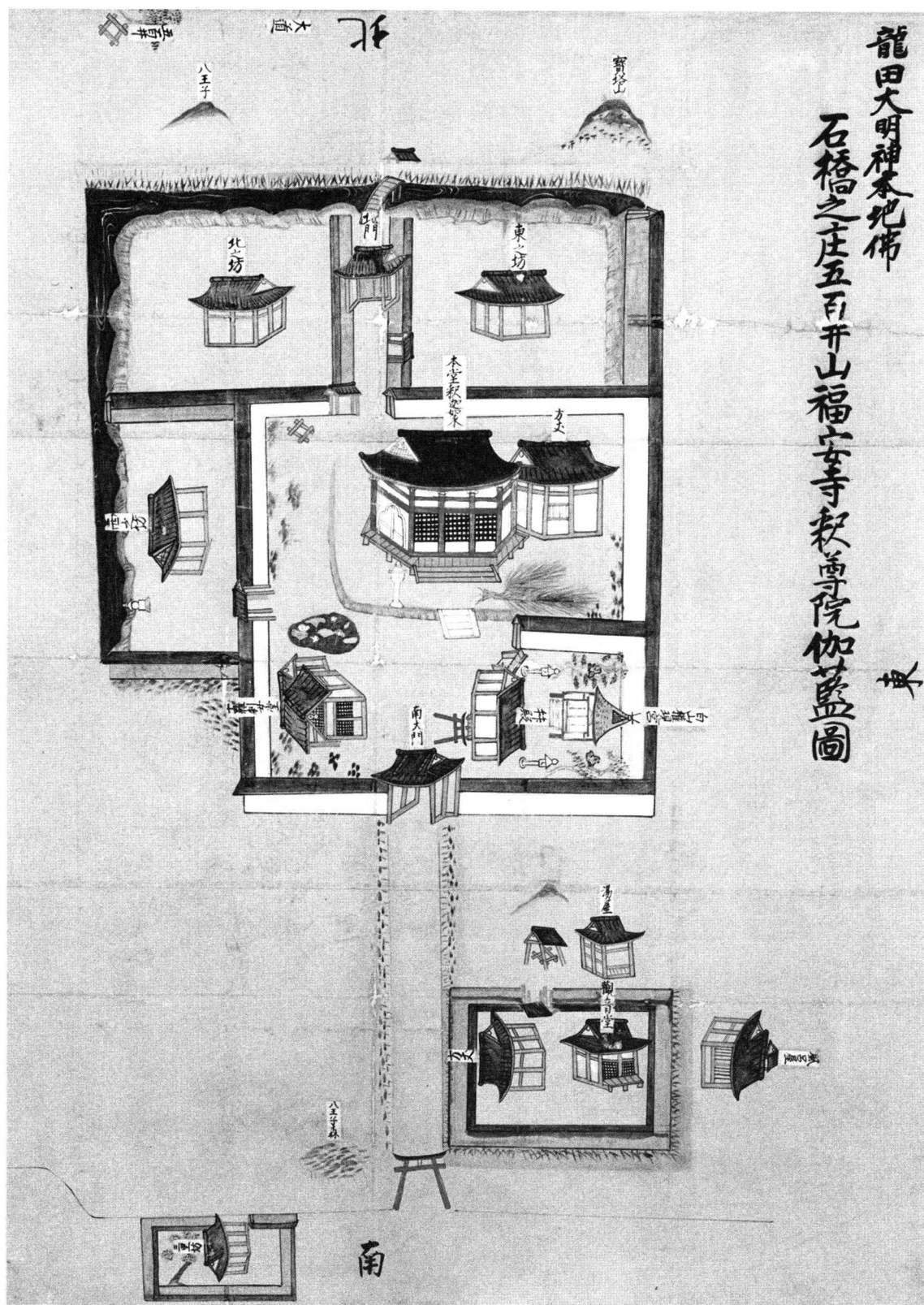
図版5 新福寺絵図（安永三年）斑鳩町服部 神楽講文書





図版 6 竜田新宮境内図（明治 2 年）斑鳩町竜田 御宮司家文書





図版 8 五百井山福安寺伽藍図（江戸時代）福安寺 葛本家文書

---

## **Aspects of Religious Services as Seen through the Section for Shrine Parishioners in the *Tatsuta-jinja* Shrine of *Ikaruga-cho***

OMIYA Morihito

Hattori is situated approximately one kilometer south of Horyu-ji temple and Kitasho (Tatsuta-kita) is situated approximately one kilometer northwest of Horyu-ji temple. There are sub-shrines and temples in the villages, and they have a traditional aspect as they had a miyaza (council of elders who represented families who claimed association with a local shrine and who annually elected a shrine official to run festivals).

However, a closer examination of the location of Kitasho reveals that it goes up to the southern tip of Yata hill that lies behind Horyu-ji, lying between hills on which there are rice-paddies. Hattori is a type of village with a moat surrounding it where low-lying land was raised and drainage was a most arduous task. Both villages are under siege from the wave of urbanization today and are trying to prevent themselves from being buried by new housing. At the same time, there are points of interest among the differences in the religious organizations and religious services that have barely managed to survive to the present day.

At one time, both villages took part in the religious services of the Tatsuta-jinja shrine (new branch shrine) which served as the local shrine for the whole of Ikaruga, but today it is only the former miyaza (the Kasuga association) of Kitasho that continue to visit the shrine dressed in traditional clothing to present offerings there.

It is thought that the differences in the religious services of the two villages that arose in the process of modernization are attributable to the presence or absence of assets held by the religious associations and that assets provide an incentive for the immediate future of religious services as part of communal life. Here, I present an overview of present-day religious customs as part of an effort to understand the process of the transformation of relevant local culture.

There is an wealth of documents and records related to the villages and shrines and temples in this region and by the adoption of a multidisciplinary approach it should be possible to derive a cautious understanding of the chronologies of the process of transformation of folk customs. In particular, the degree of accuracy of the understanding of local miyaza and the like has improved dramatically as a result of the recent discovery of documents belong to the kagura association of Hattori in Ikaruga-cho and the subsequent sorting, deciphering and study of these documents (refer to papers by Sonobe and Moritomo Omiya).

In addition, a joint research project has made it possible to sort and compile and index of re-

---

---

lated documents, including documents from the Ongushi family (Tatsuta) and the Fukita family (Hattori), which will contribute to future research.